

徳地町の三坂神社で戦後50年を記念して

# 参道に「平和の石畳」を

戦時中に武運長久の神とされた歴史背景に



塩などをまいて参道や機械のお祓いがされた(6日)

徳地町岸見の三坂神社(佐伯治典宮司)で、今年が戦後50年を迎えるのを記念して、参道の一部に

世界平和への意志を込めた石畳を造ることになり、6日、氏子の代表らが集まり工事の安全祈願祭が行われた。

三坂神社には、一の鳥居と二の鳥居の間と、社殿前の参道に足利尊氏が築いたと伝えられる石畳があるが、二の鳥居から社殿までの一部には石畳がなく、雨で土が流れるなどの問題もあった。また、同社は戦時中に武運長久や守り神として全国的な信仰を集めたこともあり、今回の平和の石畳の築造になったもの。石畳が造られるのは、これまで石畳のなかった

巾4m、長さ65mの参道。石は260軒の氏子が持ち寄った。

安全祈願祭は氏子の代表らが参列して行われ、佐伯宮司が祝詞を奏上した後、全員が塩などをまいて参道や工事に使う機械などのお祓いをした。「この石畳を踏みしめて、平和への意志を新たにしたい」と、佐伯宮司。平和の石畳は、節分までの完成を目指して工事が進められる。

## 第2次大戦出征兵士の奉納写真

# 弾よけ神社から5000枚「帰郷」

山口県豊前町の三坂神社は第2次大戦中、「弾よけ神社」と呼ばれ、出征兵士の留守家族が一生懸命に祈りを込めて、父や夫、息子の写真や奉納した。その数なんと一万枚。戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。

(山口県防務通信局・中野 聖)



### 山口・三坂神社

佐伯さんの周囲には、ぎゅっしり写真を詰め込んだ段ボール箱が十七、八個、天井まで積み上げられて、大半は軍隊だが、家族の写真もある。ほとんどもが「武器長久」などと書かれた和紙に十字にぐるまされておくり、愛はあふれる。神社は戦後、旧軍部の臨時の住居が密集し、敷地を借りた。参拝者の神は、直前に焼いたが、写真は宮司だった佐伯さんの父親、隣家の床下にも隠して残した。和紙に書かれた戦後、高橋の文字は、そのときまで焼くつぎされてる。

佐伯さんが、写真の返却を本格的に始めたのは、定年退職の年か、戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。

佐伯さんが、写真の返却を本格的に始めたのは、定年退職の年か、戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。

佐伯さんが、写真の返却を本格的に始めたのは、定年退職の年か、戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。

## 宮司、本人や遺族捜し返却あと一万5000枚

佐伯さんが、写真の返却を本格的に始めたのは、定年退職の年か、戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。



写真の詰まった段ボール箱を、全部返せばいいのです。が、利益がある一として返す。三坂神社は、自前、日課職になったといわれる。

むね辺佐夫(むね)さん(65)は、山口県下松市の山田町で、父が太く、お母さんが、写真の返却を本格的に始めたのは、定年退職の年か、戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。

約三十枚の輸送箱には、アイビーの方向途中、米軍の魚雷攻撃でほとんどが沈没。原田さんは海に投げ出され、十六日間近く漂流したあとに救助された。一週間たつたので、船中にいた仲間がほとんどなくなっていた。

佐伯さんは、戦中、戦後に渡ったが、戦争が終わった。佐伯さんが、写真の返却を本格的に始めたのは、定年退職の年か、戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。

佐伯さんが、写真の返却を本格的に始めたのは、定年退職の年か、戦後二十年たつたいま、佐伯市長官邸が、本人や遺族を探して、すべて写真を返している。これまでに約五千枚を返した。「一枚一枚が、早く家族のもとに返りたい、と願っているようです。全部済むまで、私の職後は終わります」と佐伯さんは話す。

1995年(平成7年)5.10

奉納写真返却続ける

## 「弾よけ神社」に 激励の便り続々



届いたはがきや切手を整理する佐伯宮司＝山口県徳地町岸見の自宅で

第二次大戦中に出征兵士の無事を祈って留守家族が奉納した写真を本人や遺族に返し続けている山口県徳地町岸見、三坂神社の佐伯治典宮司(六十)のもとに、全国から激励の便りが続々届いている。同神社は「弾よけ神社」と呼ばれ、当時、二万枚の写真が奉納された。返し続ける佐伯宮司のことが先月、朝日新聞で紹介

された。「戦争を知らないう若い人たちからの励ましに、特に元気づけられる」と佐伯宮司。寄せられた手紙やはがきは、すでに二十通ほどにのぼっている。

東京都清瀬市の中学一年正田容子さんは「新聞をみて、お手伝いしたいなあと思ったのですが、東京と山口では行こうと思っても行けませんので、こうして応援のお手紙を書きました。お一人では大変だとは思いますが、がんばってください」と書いて来た。一万五千八百四十円分の切手を同封した手紙を送ってきたのは神奈川県厚木市の柴田美保さん。「戦後二

十年近くたって生まれたので、何もわかりませんが、家にあつた切手をわずかで送ります」

匿名の二人からも一万一千七百六十円分、五千円分の切手が封書で届いた。

佐伯宮司は返事を出す。「私の年齢のこともあり、あと何年続けられるか分かりませんが、みなさんのやさしい気持ちにこたえるよう返却作業に精を出します」

三坂神社は日清、日露戦争に従軍した氏子に戦死者がなかったことから「弾よけ神社」として有名になった。奉納された写真のうち四月末現在の返却枚数は五千百十枚で、まだ約一万五千枚が残っている。

# 51年目の夏 —宗教者らに語り継ぐ—

②

山口県徳地町に鎮座する、「武蔵長久」という文三坂神社は、日清・日露の争があった。維新の時代から第二次世界大戦に（文三）が渡りつづけてきた。折柄にあたって奉納された写真はおよそ二万の枚数を主眼とする神道用紙、軍服や学生服姿の若者、手紙や「おまけ」など、その写真は、時空を超えて、見る者に歴史の重さを感じさせる。同じ宮司だっただけの遺志を継いで、本人や遺族に写真の返還を続ける佐伯信典宮司（67）の活動は、五十一年目の夏を迎えた。

## 弾丸除けの奉納写真を返し続ける

山口二坂神社 佐伯信典宮司 父子2代にわたりコツコツと



「奉納された写真を全部返して初めて私の戦後が終る」と話す佐伯信典宮司

山口県徳地町に鎮座する、「武蔵長久」という文三坂神社は、日清・日露の争があった。維新の時代から第二次世界大戦に（文三）が渡りつづけてきた。折柄にあたって奉納された写真はおよそ二万の枚数を主眼とする神道用紙、軍服や学生服姿の若者、手紙や「おまけ」など、その写真は、時空を超えて、見る者に歴史の重さを感じさせる。同じ宮司だっただけの遺志を継いで、本人や遺族に写真の返還を続ける佐伯信典宮司（67）の活動は、五十一年目の夏を迎えた。

「奉納された写真を全部返して初めて私の戦後が終る」と話す佐伯信典宮司

「私は海軍長官最後の七十八期の生徒でした。昭和二十年の、個の中が真っ白になった日々を思いだし、お国のために命を投げうって死んだ人たちのことを思うと、写真を保管しておくだけでは相済まない気がしてね」

次節に手紙が少なくなる中で、はがきを出したが必要のなかつた人の住所を尋ねても、連絡を断つたという佐伯宮司は語る。

（編集委員 栗田大祐）

# 2011 伝える戦争

## 神社に眠る出征者の写真

裏側に記されていた名前と住所を頼りに、はがきで連絡を取った。

戦地へ向かった青年たちの写真が今も残されている神社がある。ぼろぼろに色あせた数千枚には、それぞれに出征した息子の生還を祈る親たちの思いが込められている。写真は、ひっそりと返還の時を待っている。

山口市と防府市の境を流れる一級河川・佐波川沿いにある三坂神社（山口市徳

地岸見）は日清、日露戦争で氏子全員が無事に帰還したとして、「弾除け神社」と呼ばれるようになった。第2次大戦時には、出征者の写真を奉納する多くの家族らが参拝。大戦が激化し始めた1943年（昭和18

年）には、1日880人が訪れたという記録もある。軍服、和服、学生服姿……。全国各地のほか、旧満州国や台湾などからも送られてきた写真は、拜殿と本殿を結ぶ幣殿にある「武運長久」を祈願した奉安所に納められ、今も8000枚以上が保管されている。

### 8000枚宮司「返したい」



「写真を1枚でも多く返却したい」と話す佐伯さん＝秋月正樹撮影

「死んで帰れと励まされた時代。でも、心の中で『生きて帰れ』と願った親の思いなのでしょう」。宮司の佐伯治典さん(82)が写真に込められた思いを代弁した。

戦時中に奉納された写真は約1万7000枚に上るが、なぜこれほど大量に残っているのか。

終戦直後、占領軍から危険視されていた神社は立ち入り検査を受けた。当時、宮司だった佐伯さんの父・哲三さんは検査前、参拝者を守るために写真を隣家の床下に隠し、参拝者名簿は焼却した。このため、奉納者が分からなくなつた。

終戦から7年が経過した頃から、息子の生還を喜ぶ「お礼参り」の参拝者が訪れ、写真の返却が始まった。返却数は毎年1桁と少なかったが、佐伯さんは、教諭を退職した89年から写真の

「親の愛情を知って、号泣する人もいました」。佐伯さんは返却の意義を感じていた。活動が新聞やテレビで紹介されると返却数が800枚を超えた年もあったが、戦後50年を過ぎたあたりから再び1桁に。その後、返却は難航した。

今年6月、雨漏りの修繕のために整理した神社の蔵から、見慣れない木箱が見つかった。中には「写真預簿」と書かれた10巻の書物があった。焼却された参拝者名簿とは別の名簿で、奉納者の名前と住所がはつきり読める字で記されていた。

「何かの引き合わせでしようか……」。視力、足腰の衰えを隠せない佐伯さんの表情に生気が戻った。「全ての写真を本人や家族の元に届けるまで、私の中の戦争は終わらないのです」

(鶴結城)